

No.

論文概要書

本質論としての近世俳論の研究

ふくもと いささう
復本 一郎

論文概要文書

本質論としての近世俳論の研究

復本一郎

まず、本論全体の執筆意図を記し、その後、章立てに従って、その概要を述べることにしたい。

私が、本論で意図したことは、近世俳論を通じて、俳諧の本質を探ることであった。換言すれば、「俳諧とは何か」ということを

明らかる作業も、俳論を通じて行うということである。

俳諧は、和歌の三十一文字の世界も、十七文字に縮めただけの、単なる和歌のミニチュアではないことは多論であらう。確かに、貞門俳諧・談林俳諧・蕉風俳諧を通じて、そして、それ以降も、俳人達は、しばしば「俳諧も和歌の一体」との言葉も繰り返している。が、繰り返すことによって、遂に「俳諧とは何か」を確認すべく摸索していたと思われ

るのである。本論は、その様相も、俳論史の流れの中にもあうとするものである。

従来の俳論史の研究は、俳論の中に、流派としての特色・時代としての俳諧の特色、地俳諧の域としての俳諧の特色、そして、個々の俳人それぞの俳諧の特色を探り、明らかにすることにかがそがれてきた。その結果、俳諧史の未開拓分野が、少しずつ少しずつ切り開かれてきた。本論においても、それら諸先生による目覚ましい成果を可能な限

リ踏まえさせていた。い。し。本論自体が、そのような未開拓分野に、私の力の及ぶ限りで挑戦を試みた部分もある。

が、私が、本論で、最終的に意図したのは、それら、いわば八個の俳論史ではなくして、流氷・時代・地域・俳人等々を超えて、俳論史を貫通するいくつかの俳論的特質を抉りだして、八流氷としての俳論史を構築することであった。

その取っかかりとして、私は、八和歌離氷

八和歌一体化の視点を設定した。すなわち、俳諧史も、八和歌離氷八和歌一体化の相剋の歴史と、まずは捉えるのである。このような視点を設定することによって、俳諧発生期より、貞門俳諧・談林俳諧・蕉風俳諧・十らにそれ以後と、諸俳論を貫通する八流氷としての俳論史の特質のいくつかの側面が見えてきた。俳諧が俳諧たり得るのに必要不可欠な特質である。それら、一つ一つ八流氷において確認することによって、自ずから

俳諧とは何かしらが明らかになってくるであろう。本論では、その中の一つ「作意」に焦点をあてて検討を試みた。

今後の私自身の課題としては、さらに執拗に俳論史を追うことによって、従来すでに言われている特質とは別種の特質を、俳論史のへ流れの中に見出したすべく努めることである。うし、すでに見出だした特質、例えば「諧し（諧解き）」のときは、俳論史のへ流れの中、より精緻な検討を加える必要

「論文篇」

*

要がある。そして、それらの諸特質が、相互にどのようなかかわりを有しながら、へ流れとしての俳論史を貫通しているかということも、見届けなければならぬ、と思っている。

以上、本論の執筆意図と、今後の課題を記したので、以下、章立てに従って、その概要を述べることにする。

一 俳論史序説

(一) へ和歌離れへ和歌一体化への俳論史
貞門の俳人・有藤徳元の俳論書。俳諧初学抄。(寛永十八年刊)中に見えつゝ、さすがに俳諧も和歌の一翫なればとの指摘も嗜みとして、芭蕉の弟子去来による俳論書。去来抄。へ元禄十五年から宝永元年の間の成立中の「修行」の部に見えつゝ芭蕉の言「はいかいもさすがに和歌の一体せしに至るまで、」俳諧も和歌の一翫」との言葉は、貞門、談林、

そして蕉風と、流氷も超えて、繰り返し、繰り返し述べられている。「和歌の一翫」であることも確認することによって、可能な限り和歌と同化しようとする姿勢がある。一方、俳諧も、和歌のもつものの性格から解放しようとする姿勢も伝える俳論書も、前者と表裏を成して、流氷も超えて存在する。
そこで、私は、前者のごとき姿勢もへ和歌一体化へ、後者のごとき姿勢もへ和歌離れへ

と呼ぶことにしたのである。

談材俳諧、

そして、そのような姿勢をも、初期俳諧、

貞阿俳諧、蕉風俳諧の諸俳論の中に探るてみた。その結果明らかになったことは、八和歌離れVと八和歌一体化Vの姿勢は、流水を起えて相互に牽制しつつ存在していたということである。すなわち、俳諧史とは、八和歌離れVと八和歌一体化Vの相剋の歴史であったということである。

それ故、八和歌離れVの姿勢に注目する

ことによって、そこに自ずから、多様な俳諧性が浮び上ってくるわけでもある。そして、私は、その多様な俳諧性の中から、易大公約数としての俳諧の本質を抽出せんとするわけである。

なお、芭蕉は、八和歌離れVにも八和歌一体化Vにも目配りをしている。芭蕉俳諧の特色の一つであり、このことが、芭蕉俳諧の質の高さに繋がるものであろう。そして、この姿勢を理念化したものが、彼の唱えた「不

易の流行してある。

(二)「作意」の流れ

貞門俳諧・談林俳諧・蕉風俳諧を起えて存在する俳諧の特質の一つに「作意」がある。俳諧が俳諧たり得る必要不可欠の特質であることは、芭蕉の弟の「子土茅の俳論」三冊子（元禄十五年頃成立）中の「白双紙」が伝える芭蕉の言「詞に有。ルに有。其外（中略）作意に有。」にも窺うことができてある。

「作意」は、俳論史のスタートにおいて、

松江重頼によって、その俳論書の毛吹草（

寛永十五年自序）中に、明確に定義される

のである。そして、芭蕉自身による、元禄

七年二月二十五日付の弟子許六宛の書簡中

の「世に鳴もの、三つ物、惣而地句等、皆く

手帳の外は三歳兒童の作意ほどもうごかず候し

の言に至るまで、貞門俳諧・談林俳諧・蕉風

俳諧を通して、その俳諧性において、「作

意」は、常に枢要なる位置を占めているの

である。

無論、それぞれの流派の俳風の特色と無関係ではなく、「作意」の具体的形象化において、
「作意」の変質が見られるわけであるが、その核となる部分は、流派を超えて、俳論史へ俳諧史へ貫通しているのである。
すなわち、先の重頼の『毛吹草』において、重頼は、「本より詞はふるく、心はあたらしくな」と、古人も申給ふし。」と指摘したのであった。この指摘は、言うまでもなく、藤

原定家の歌論書『詠歌大概』中の「情以て新為レ先 詞以て旧可レ用」を踏まえてのものであった。そして、このことは、「作意」論のへ流れの中、繰り返し確認される。
この点に注目するならば、ややもすれば芭蕉の「たとへ物あらはに云出ても、そのものより自然に出る情にあらずれば、物と我二つになりて、甘情、誠にいたらず、私意のなす作意也。」（『三冊子』）「赤双紙」しこの言なども作用して、「作意」とは最も対蹠的

なところにあると考えられがちな蕉風俳
諧でさえも、土著の「新しきは俳諧の花せ。」
（『三冊子』）「赤双紙」に代表されるよう
に「新しみを標榜する言」る以上は、
作意にも、俳諧の特徴の一つとして、真正面
から受け止める必要があつたのである。

(三) 「不易流行」説を受ゆ

私のいわゆる「和歌離れ」へ「和歌」一体化の
の相剋の歴史としての俳論史という把握の仕
方が的確なものであるとしたならば、それは

当然、芭蕉以後の俳論史においても有効であ
るはずである。そこで、私は、それな視点
を、芭蕉の俳諧理念である「不易流行」の言
受の諸相を検討することによって明らかにす
ることにした。何故ならば、「不易」は和歌
性とかかわり、「流行」は俳諧性とかかわ
り、それはそのままへ「和歌離れ」へ「和歌」一
体化の相剋の歴史としての俳論史へと繋がる
可能性を有しているからである。

本論では、芭蕉の「不易流行」の首意につ

いては十分に検討をしなければならなかったが、芭蕉俳諧の理念としての「不易流行」は、本来的には矛盾する概念である。「不易」と「流行」というものを、二つながら見事に一句に形象化してみようとしたものであったと思われ。先にも述べたごとく、芭蕉が、八和歌離れと八和歌一体化の両方に均等に目配りしているのは、そのことを裏付けるものである。が、その享受史のへ流れにおいて、芭蕉の直意とは別に、ほとんどの俳人等が「不

易」と「流行」を、別々に分けて考えているのである。その趨勢も、芭蕉の直弟子達の「不易流行」論からはじまって、化政期の鶯の笙の俳論、芭蕉葉がゆゑ文化十四年刊しまで追ってみただけである。

その間、例えば、「三顔合」(元文五年刊)中の「留別詞」において展開されている蘆元坊の「不易流行」論に対する反論としての、安永・天明期の涼袋の俳論書、俳諧南北新話(延享五年刊)中の「流行の客論」のごとき、

「流行」重視の「不易流行」論・すなわち八和歌離れへの姿勢を示した俳論もあるにはあるが、右の蘆元坊をはいねとして、芭蕉以後の俳論史の大勢は、圧倒的に「不易」重視の「不易流行」論が占めてしまっているのである。へ和歌一体化への姿勢を示した俳論である。

芭蕉以後、蕪村が、一茶が出て、それぞれ特異な俳諧世界を創造したのではあったが、そして、それは俳諧性豊かな世界

であったが、やはり、芭蕉の影響が絶大であったようである。芭蕉以後の俳論史は、もっぱら、芭蕉享受の、芭蕉理解の、俳論史として終始しているのである。

そして、芭蕉という一人の人物が俳諧史上に登場したことによって、俳諧史・俳論史は、完全に一変してしまい、著しく和歌性の勝った相貌を帯びることになったのである。俳諧史・俳論史がへ和歌一体化への時代に——それは、今日の現代俳句に至るまで延々と続い

ていふのである——突入してしまったのである。が、すでに見てきたように、芭蕉が、和歌一ツ倒の俳人でないことは多論であり、その享受の仕方、理解の仕方にこそ問題があると言えよう。俳論史の検討においても、芭蕉の的確な評価を踏まえた上で、その中の見極めが、きわめて大切かと思われる。

二 俳論史の諸問題

(一) 竹馬狂吟集の序文考

俳諧撰集の嚆矢としての『竹馬狂吟集』(明応八年序)の序文を、俳論として検討したものである。

『竹馬狂吟集』の序文については、すでに『竹馬狂吟集』の発見、紹介者である木村三吾氏によって詳細な検討が加えられている。木村氏は序文に、『竹馬狂吟集』の撰者の面影を見ようとされている。この読みが、通説化されつつあるようである。そのような読みに対する、私の疑義である。

私は、『竹馬狂吟集』の序文を、『中武千句』(慶安五年刊)に先立つ俳論の嚆矢として読まんとするわけである。そのように読むことによって、序文からは、撰者その人の面影は消え、撰者の俳諧観が、連歌や和歌とのかがわりの中から影影としてくるのである。そこにおいては、和歌の衰退、あるいは、歌壇の有名無実化が指摘されていながらも、一才では、『古今和歌集』の序文を『狂』の視点より捉えなおすことによって俳諧に取り込む

といった試みも成されていく。すなわち、俳諧の発生期の俳論において、すでに八和歌連れと八和歌一体化とが二つながら窺知し得るということは、注目してよいであろう。なお、序文解説の一つのポイントである「なにはづの、あしこしもたゝねほどにおとろへ」の「なにはづ」を、私は、「難波津の歌」さらに「歌」そのものと解するわけであるが、本論執筆以後、西行の『御裳濯河歌合』の後成判の一番冒頭部分に「豊原の國の

たさるゝとして、難波津の歌に人の心を知らく
るなかたちとなりければ、これを詠まざる人
は無かるべし。とあるのに気が付いた。こ
れなど、私説への、一つの「なにはづ」の言
葉がいかなるイメージを喚起したかの証左と
なろう。

(二) 伊丹風試論

従来、「伊丹風」の研究は、必ずしも十分
に成されていゝとは言えなかつた。

その大きな原因は、「伊丹風」の代表者

とされていた鬼貫自身の俳風の中に踏まれ
ていたのである。ハ文字舎白露の「俳論」へ
文化五年刊しは、その辺の事情を踏まえて
執筆したと思われるすぐれた「伊丹流」な
る一文を掲出するが、後代、必要箇所だけが
適宜引用され、正當に評価されなかつたのは、
残念である。

今、鬼貫に限って「伊丹風」に関する言説
を見るならば、一つは、その俳論書「独」こと
へ享保三年刊し中に見えろ「いにしへ談林風、

伊丹風などいひて、句にさまざま異形をつく
せし時節も、更に別句を志する事なく、或は
文字をけうとくあましたる句も待れど、二句
隔る旋をすらすといふ事なかりし。』との一
文であり、もう一つは、『大居士』へ元禄三
年刊し所収「禁足之旅記」中に見える「世の
常の俗言を以て作らば、全誹諧にして、しか
もその古きものがるべしと、我しはらく爰に
遊ぶ。此地にも安心せば、また例の痴みおこ
らん。只誹諧をのり物にして常をわたる人あ

らば、行す止らずして、誹諧もなく、やまの
ちなみ、大空樂界にいたらむ。』の一文を受
けての「独吟 伊丹風」の実作である。すな
わち、この鬼貫自身の発言にも明らかとな
うに、「伊丹風」には、二つの異なる概念の
能風が含まれ、なる呼称（なると呼称）まねていたのではあ
る。一は、「談林風」とのかかわりの濃厚な
伊丹風であり、一は、鬼貫自身の「大悟」
とかかわりをも有する「伊丹風」である。そ
の二つの「伊丹風」を、可能な限り多くの資

料によって明らかにせんと試みたのであった。
 ちなみに、二つの「伊丹鳳」は、庶幾それた
 時期を異にするので、私は、それらを、それ
 がそれ前期伊丹鳳、後期伊丹鳳と呼ん
 で区別することにした。

(三) 鬼貫能論の構成

鬼貫の能論書。然ごとく「享保三年刊」を
 一読すれば明らかなるように、その上巻におい
 ては、六十九条中、十七条三十一例にわたっ
 て「まこと」が様々な角度より解説されてい

る。鬼貫能論の大きな特色は、その「まこ
 と」論にあると言っている。無論、鬼貫にお
 いても「詞すなを仕立てたらん句を専一な
 りと、一概におもふべからず。能言たくまし
 からんにこそ、はいかいの趣はたち侍るべけ
 れ。」へ「独ごとく」に代表されるように、
 「能言」を中心とした「言」しての能言性への
 目配りもあるにはあるが、「まこと」を積極
 的に唱導することによって、その能言世界が
 著しく八和歌一体化の様相を有したものの

であつたことはいふまでもない。

その鬼貫の唱える「まこと」に、「独」
の序を書いている、鬼貫と同年の歌人有賀長
伯の影響を指摘し、それを具体的に長伯の
歌論「初学和歌式」や和歌八重垣、以教斎
閑書、等々で展開される「真実」論とのかか
わりにおいて明らかにせんとしたのが、本論
である。その検討の過程において、鬼貫が唱
えた「まこと」の論が、人爲による「まこと」
の獲得を意味するのではなく、「まのづか

らのまこと」の境地の修得を自指したもので
あつたことも明らかとなつた。

なお、加えるならば、その「まこと」を連
句において具体的に形象化する方法として
「のりなじみ」ということを論じているとい
うことである。この「のりなじみ」は、鬼貫
俳論独自のものである。

(四) 「うごく句」「うごかぬ句」の論

近世俳論を一貫して俳人達の関心を集めた
テーマに「うごく句」「うごかぬ句」という

ことがある。「ふる句」「ふらぬ句」とも言われる。従来、このことに関しては、もっぱら、蕉風俳論に限定されて検討が加えられていたために、いま一つ毅然としない部分があった。

そこで、私は、この問題も、俳論史のへ流れの中、で検討してみることにした。そうすることによって見えてくる部分があるのではないかと思われたからである。

具体的に検討の対象とした資料は、まず、

松春編の俳論書、蕉園拾遺物語（元禄四年刊）。本書によって、「うごく句」「うごかぬ句」ということが、「題」「落題」にかかわり、その根底には、さらに「本意」の考えが存在することが明らかになる。従来抄にもみに拘泥しては、この部分は、見えてこない。ついて、蕉風関係の俳論書の中でも、従来、検討の対象とされてなかったものに目を通していった。宇鹿編、俳諧発句十六篇（宝永六年成立）、有隣編、たね茄子

（寛政九年刊）、あるいは、編者・成立不詳の野坡系の俳論書。摺菴抄結の等である。これらによって、「うごく句」「うごかぬ句」が、「題」「本情」（「本意」と近い概念の用語と鬼ぬき）とかかわることが確認された。

以上を踏まえて、芭蕉の有名な二句「行春を江の人とましきけり」の検討に入っていたわけである。用いた資料は、支考の「鳥日記」（元禄十二年刊）、助然の「蝶すがた

（元禄十四年刊）、そして「去来抄」である。しかし、この一句は、歌枕と「本意・本情」とのかかわりへと発展していくことになる。以後、鬼ぬきの「独」と（享保三年刊）、「続七車」（元文二年成立）、あるいは風律の「誹諧くせ物語」（宝暦十年成立）等々にあいても、重要なテーマとして言及されているのである。

（五）文里筆や淡々本、去来抄、八枚実の位

本論は、「資料篇」の(二)に翻刻紹介した文里筆字淡々本。去来抄の意味を論じたものである。

蕉風俳論を代表する能書である去来の「去来抄」の本文の中で、**論**「先師評」と「同門評」に關しては、大東急記念文庫に去来自筆草稿が伝ゆるので、去来淨書本の出現が期待されるものの、まずは問題ない。残る「故実」「修行」に關しては、従来、国立国会図書館本が、「先師評」「同門評」の

部分に關して、大東急文庫本に近いということ、底本として用いられてきた。が、近いということと同一であるということとは異なる。今後は、特に板本にも欠ける「故実」に關しては、慎重に対処する必要がある。文里筆字淡々本の「去来抄」は、文里の添え書きによれば、「去来自筆ノ去来抄」からの「三字ノ書」であるという。私が、国立国会図書館本との校合を試みた結果では、文里筆字淡々本の「去来抄」は、

「三字ノ書」であることによるマイナス面も
 少なくはないが、国立国会図書館本を底本
 とすることに対する疑義が生じてくる部分も
 あり、十分に検討に値すると思われれる。ま
 た、読者も意識しての懇切丁寧な言い回し、
 あるいは敬語の適切な用い方、等からは、
 去来抄の洋書本の存在（特に秘伝扱いに
 されたと思われれる）故実についてはいが予
 想されるのである。

（六）芭蕉俳諧のへ笑いVの検討

20 × 20

俳論史をへ流れVにおいて眺める時、「滑
 稽」が、俳諧の特質の重要な要素であるこ
 とは、「滑稽」の質の問題ということが残る
 にしても、異論のないところである。その
 へ流れVの中で、「滑稽」を論ずるのに最も
 ためらいを感じるのが、蕉風俳諧、就中、芭
 蕉俳諧そのものである。そこで俳論史のへ
 流れVの中に「滑稽」の質的変遷を探る取
 っかかりとして、まず、芭蕉俳諧のへ笑いV
 を検討してみようというのが、本論の狙いで

ある。

その際、援用したのが、芭蕉の弟子支考が
『古今和歌集』巻第十九雑興「俳諧歌」全
五十八首に注釈を施した。『古今集俳諧歌解』
へ元禄十年成立。天明三年刊してある。この
『古今集俳諧歌解』(国立国会図書館本
によって全文の翻刻を付しておいた)の特色
は、歌の一首、一首の「俳」の質が吟味され
ているということである。無論、あくまでも
支考にとつての「俳」であるわけであるが、

師の芭蕉のへ笑いVの質を吟味するに際して、
換言すれば、芭蕉にとって「俳諧」とは何かに
を考える上で、ある種のヒントを与えてくれ
るであろうことは、十分期待し得るのである。
しかして、私は、支考の『古今集俳諧歌解』
に目配りしつつ、芭蕉における『古今集』俳
諧歌の受容の様相を検討することに、
よって、芭蕉俳諧にとつてのへ笑いVとい
ちのを考えてみたのであった。結論のみを示
してしまふならば、芭蕉は、心の「ざれ」

たはぶれとしての人笑いVも志向したとい
うことである。

(七) 風雅の誠

俳論史も八和歌離れV八和歌一体化Vの相
対の歴史であるとの視点に立って見ていく時
芭蕉に至って、両者が均衡を保って彼の中に
あることに気が付くのである。近世俳論史の
中で、このような例は、皆無であると言って
よいかと思われる。芭蕉以前にも、芭蕉以後
にも、このような例はない。

20 × 20

ここに、芭蕉俳諧の特質があると言っ
てよいであろう。八和歌離れVと八和歌一体化V
という矛盾する俳諧に対する姿勢も、一
身の中で、自事に形象化してしまっているのである。
この芭蕉の自覚の機構は解明される必要
があるが、芭蕉俳論の構構は、常にこのよ
うな様相を帯びている。「さび」は「花」
とともに形象化され、「不易」は「流行」と
ともに一句の中にある。

そして、本論で問題とした「風雅の誠」も

また、從來言われていたこときの、いわゆる「風雅」の世界における「誠」の意味するものではなかつたということなのである。それならば、「誠」だけでことは足りるし、現に鬼貫は「まこと」を説いたのであった。

芭蕉の「誠」は、弟子の土茅が「三冊子」に「白双紙」で「むかしより詩歌にもある人多し。みなその誠より出て、誠またどる也。わが師は誠なきものに誠を備へ、永く世の先達」となる。と明かしているように、「誠なき

もの」に「備へた」誠だったのである。誠なきものとは、芭蕉が携へた俳諧にほかならないのである。そして、芭蕉においては、「風雅」は俳諧の同義語であつたといふことに思い至る時、「風雅の誠」の意味するところも明らかになつてくるのである。「風雅の誠」とは、「俳諧の誠」の意であり、俳諧が「俗」と「雅」の微妙な均衡を支へた文学であることを説明せんとした、芭蕉腐心の言葉だったのである。

(ハ) 位

芭蕉発句の美的理念に「位」がある。芭蕉連句の「位」についてはしばしば論じられるが、発句の「位」について論じらることは、ほとんどない。

その「位」を、「位」論に登場する「高位」「下品」「上品」「たくらべ」「あたり合う」等の用語を挺にして検討を加えたものである。

「位」を構造的に論じるならば、「心の位」

(ハ) 三冊子。「赤双紙」と「句の位」(ハ) 去来抄。「修行」とに分けて考えられる。「心の位」が「句の位」として形象化された場合の評言が「上品」であり、「位」の視点に立つてのマイナス評価を示す評言が「下品」ということである。マイナス評価の原因となるものが「たくらべ」あるいは「あたり合う」という現象を誘発するところの「心中の理屈」であり、「句中の理屈」である。かくて、「位」論は、「理屈」を媒介として

「かろみし論」と繋がつていく側面も有して
いるのである。

なお、芭蕉から「句の位尋常ならず」と
評されたへ卯の花のたえ間たゝかむ闇の門の
の去来の一瞬が、
「夫木和歌抄」中の寂蓮の
へうの花を垣根のまゝにながむればいてぬる
門にめぐりまにけり」を本歌とするもので
あることへ「作の跡の見えざる」本歌取りの
句しを指摘した。優美性を獲得し得ている。

(た) ちび・しほり・ほそみ

芭蕉俳論、あるいは、蕉風俳論に散見する
「ちび・しほり・ほそみ」の質的なちが
いについては、すでに、「ちび」と「詞」の両
面より、拙著^{芭蕉}「ちび」の構成じい(堀
書房、昭和48・4)において述べた。

そこで、本論では、蕉風俳論ではしは論
じらぬ「ちび」のかかわりにおいて「ち
び・しほり・ほそみ」を検討すること
にした。その対象となったのは、許六の「歴
代滑稽伝」(正徳五年刊)、「俳諧雅楽抄」

(宝永三年成立)であり、其角の『句兄弟』
(元禄七年刊)であり、支考の『十論為弁抄』
(享保十年刊)である。

検討の結果、許六の『絃玄』も、其角の『
絃玄』も、支考の『絃玄』も、余情と韻律の
二つの側面を有し、ほゞ其角の意味内容に
有する言葉として使われていることがわか
った。そして、許六においても、支考におい
ても、『絃玄』は、『さび』(『しほり』)
『ぼそみ』に比べて必要不可欠の要素であ

ることが判明した。

(十) あだ

「あだ」に関しては、はやく「資料篇」
に示した文里の『去来抄解』(文化三年
成立)が「無味ノ味」の視点よりすぐれた
解釈を提示しているが、研究史においては、
しばしば、倭艶・華麗の美として理解され
る傾向にあった。対して、尾形伸は、「あだ」
は「徒」であり、「小児のごと」氏「き無心」
な態度から生まれた無邪気でユーモラス

万詩趣であるとの、すぐれた理解を示された。
た。

本論では、「あたし」が「伊賀の連衆」とのかかわりにおいて説かれること、「無智」とのかかわりにおいて説かれることに注目し、尾形説とは別種の解釈を示してみた。

すなわち、前者に関しては、許六の「能詮問答」中の「同門評判」が「伊賀の連衆」を「たとへば天鼓が鼓のごとし。近年諸集に出る伊賀の俳諧を見るに、打つ人に応じて鳴る

る。」と評していることを見出だし、それを考察の対象とし、後者に関しては、芭蕉自身が「おくのほそ道」において、弘五左衛門を評して「あるじのなす事にむとづめてみるに、唯無智無分別にして、正直偏固の者也。」と語り、俳文「移芭蕉詞」において「胸中一物なきを貴し、無智を至とす。」と語っていることに着目し、肯定された「無智」を考察の対象とした。

肯定された「無智」を、芭蕉の指導の下、

素直に受け入れることができたので（「打
つ人に応じて鳴る」と）、「伊賀の連衆」の
中に「あだ」の美が花開いたのである。

（土）「浅き砂川」の意味

芭蕉は「かるみ」と、しばしば譬喩によ
って示している。その中の一つに子珊編「詐
語別座鋪」（元禄七年奥書）の子珊序中に見
える「今鬼ふ体は浅き砂川を見るごとく、句
の形・付心ともに軽きなり。其所に至りて意
味あり。」があるが、本論では、この譬喩が

直弟子達によって、どのように理解、享受
されていったかを検討し、芭蕉の「かるみ」
の真意に迫ろうとした。

その検討に先立って、そもそも、序中に芭
蕉の「かる言」を収める「詐語別座鋪」とは、
どのような撰集であるのかを、編者子珊自
身の序と、巻軸に置かれた一文とを通して
考えてみた。総体としての「詐語別座鋪」論
である。「詐語別座鋪」は、全体、見事に「
かるみ」を形象化し得ている撰集であっ

たのである。

「かきみしをへ境地」と解するが、へ風体と解するかは、「かきみし論の一つの問題点であるが、口詐語別座鋪口で、子珊が、その序を「府の生平のふとへに衣打かけ身がうく成行程」と書き出しはじめるところに注目するならば、へ風体とであると、すぐに結論するわけにもゆかないように思われる。

その辺のところは、直弟子幸一の「浅き砂川」理解にも、微妙にはあるが、窺知し得

るのである。この譬喩に注目しているのは、風国編の初蟬口（元禄九年刊）の鳥落人（惟然）の序であり、風竹編の砂川口（元禄十二年刊）の自序であり、助然編の蝶すがた口（元禄十四年刊）の朱如の序である。

*

〔資料篇〕

口去来抄解の解題

論者のみ蔵の田文里著の去来抄解の（文化三年成立）、および同書中に収められている

文里筆や漢々本へ故実✓について、比較的詳しい解題を試みたものである。書誌・作者・成立・内容等に言及した。なお、日去来抄解の翻刻に当っては、句読点・濁点も付するは勿論のことにして、人名・書名には傍線・特に重要と思われる箇所には傍点も付して、私の読みを明らかにしてあるので、単に資料の提供ということにとどまるものではない。

(一) 田文里著、去来抄解

(二) 文里筆や漢々本、去来抄へ故実✓

「注釈篇」

「鬼貴旅日記」(禁足之旅記)評釈

上島鬼貴が元禄三年に執筆した紀行文で、禁足之旅記とも、明和六年丑年春正月、平安書肆・麩屋町通書願寺下ル町・安藤八左衛門坂におにっら句下下も底本として、「鬼貴旅日記」と題して翻刻、へ現代語訳へ校異✓へ語釈✓へ評✓を施したものである。

本論において、やや異質であるかもしれないが、「伊丹風」・「バル」と「姿」の論等も見え、鬼貫の俳諧観を採るに当って必読すべきものであり、かつ、従来、まったく注釈が加えられなかったものなのである。この「注釈篇」を設けて、収めた次第である。